

2009年12月16日

～定年は不安だが、65歳過ぎたらリタイアしたい～

特定非営利活動法人「定年GO」（東京渋谷区。正木徹理事長）は本年11月に、無作為に抽出した職業を持つ人たちのリストにより300通の調査票を送って、定年に対する意識調査を行った。

この調査に142名の回答があり、このほど集計をまとめたので報告する。

集計の対象となったのは22歳から67歳までの男女で、定年のない自由業などを職とする人たちも含まれる。年齢構成は20代3.5%、30代9.2%、40代26.8%、50代36.6%、60代23.2%で、50代60代の定年世代の回答率が高くなっている。回答総数142名のうち定年のない人が38名（26.8%）となっているが、そのほとんどは自由業である。

「定年イコールリタイアという時代ではなくなった」

本調査から読み取れた定年に関する世相で顕著なことは、わが国でも一時志向された「ハッピー・リタイア」に期待する傾向はほぼ消え、定年が仕事をやめて悠々自適の生活に入るという考え方は過去のものとなったということである。これは、定年以降の雇用促進^{*1}と年金需給年齢の引き上げ^{*2}に符合して、働く人たちの意識が動けるうちは仕事をするという方向に変化していることが大きいと思われる。

定年がある人たちの8割以上が60歳定年だが、その中の7割以上が定年後も仕事を続けるとしており、特に定年世代の50歳以上では8割が働き続けると回答している。ここには、60歳の定年以降も年金をフルに需給できる年齢まで、収入を得るために働かなくてはならない現実が見えている。

「滅私奉公はやめて、自分の時間が欲しい」

一方で定年後も働く人たちの半数以上が65歳までにはリタイア（仕事から離れる）したいと答えている。定年後の仕事がそれ以前と同様の仕事であると回答したのは43%で、半数以上は定年前までの仕事と異なった仕事に従事しなければならないとしている。定年直後の生活に対する不安をもつ人が、50歳以上の年齢層では7割を超えるが、その先にあるリタイアに対してはそれを心配する人は3割と半減する。

ここに、当面働かなくてはならないが、ある時点からは余生を楽しみたいという願望が見えてくる。

「生涯働きたい」

一方で、リタイアもせず生涯働きたいという人は、自由業も含めた全体の3割に達している。定年がある層でも、その約4割は65歳以降も仕事を続けたいと回答している。健康で働けるかぎり、好きな仕事なら一生続けたいという願いも読み取ることができる。

※¹ 改正高年齢者雇用安定法

急速な高齢化の進行等に対応し、高年齢者の安定した雇用の確保等を図るため、事業主は、(1) 定年の引上げ、(2) 継続雇用制度の導入、(3) 定年の定め廃止、のいずれかの措置を講じなければならないこととするとともに、高年齢者等の再就職の促進に関する措置を充実するほか、定年退職者等に対する臨時的かつ短期的な就業等の機会の確保に関する措置の充実を図ることを内容とする改正高年齢者雇用安定法が平成16年6月5日に成立し、平成16年12月1日から施行（高年齢者の安定した雇用の確保等を図るため措置については平成18年4月1日から施行）された。

※² 年金需給年齢の引き上げ

老齢厚生年金は、男子は平成13（2001）年度から、女子は平成18（2006）年度から支給開始年齢が順次引き上げられ、最終的には65歳支給開始となる。